



日本を語るワインの会

Vol.90

令息
成蹊大学理工学部情報科学部
ベサリ・ティダ氏



令夫人
レコ・ティダ氏



アルバ共和国大使館
特使兼大使
ブヤール・ティダ氏



タレント
石田純一氏



弁護士
南出喜久治氏



山元学校留学生在担当事務局次長
宮崎計実氏



2010 LEAF代表
東京大学経済学部金融学科四年
和田朋子氏



株式会社ティーケービー
代表取締役
河野貴輝氏



山元学校 学長
山元雅信氏



令夫人
南出恵林氏



11月11日、日本を語るワインの会を代表自邸にて開催しました。バルカン半島で長い歴史を誇る国・アルバニア共和国大使のブヤール・ティダ氏と令夫人、令息、テレビでの姿とは異なり実は論客としての側面も持つタレントの石田純一氏、憲法の専門家として「日本国憲法無効宣言」という本も出版している弁護士の南出喜久治氏と令夫人、画期的なビジネスモデルで全国に日本一の500超の貸会議室を展開する株式会社ティーケービー代表取締役 河野貴輝氏、学生や民間レベルでの国際交流を推進する山元学校学長の山元雅信氏、東アジアの学生が集うLEAF (Linking East Asian Future) 代表の和田朋子氏、日本語・英語・中国語・韓国語で発信される多言語Webマガジン・グローバルコミュニティを手がける宮崎計実氏をお招きし、外交から憲法まで、日本が今直面している課題を語り合いました。

アップレタケン 日本を語るワインの会
今月のおすすめワイン
ポメリー・ブリュット・ロワイヤル
Pommery Brut Royal
シャンパン
生産者 グラン・ポメリー・モノポール社
生産地 フランス
19世紀後半、当時甘口だったシャンパン界に初めて辛口を導入し、斬新な美味しさで人々を魅了し、「シャンパンといえば辛口」を常識にした。辛口シャンパンの正統。香りはデリケートかつ豊か、なで相橋系の果実を感じます。エレガントで滑らかな飲み過ぎないシャンパンです。

バルカン半島でも歴史のある「鷲の国」アルバニア

アルバニア共和国はアドリア海に面したバルカン半島の国だ。国旗には赤地に双頭の鷲が描かれているが、この赤は十五世紀に国を守るために活躍した国民的英雄・スカンデルベクの血を表現しているといわれている。日本では国民が自分の国のことをニッポンと呼ぶのに、海外からはジャバンと呼ばれるのと同じく、アルバニアという国名は他国からの呼び方で、国民は自分たちの国を「シュチバリア」と呼んでいる。これは「鷲の国」という意味だ。言葉はアルバニア語。アルバニアの人口は約三百四十万人だが、アルバニア語は世界で約八百万人が話している。歴史上有名なアルバニア人も数多く存在する。例えば、マザー・テレサの両親がそうだ。古代ギリシャローマ時代の建物や遺跡が残るアトリントや「千の窓の街」と呼ばれるベラト、オスマン帝国時代の街並が残るジロカストラなどの世界遺産がある。バルカン半島でも最も歴史のある国のひとつだ。紀元前二世紀にローマ帝国に支配される前から、イリュリア人によるイリュリア王国が作られ、繁栄していた。今のアルバニアの国土の面積は四国の二五倍ほどだが、当時は今の二倍の領土を保有していたという。ローマ帝国やオスマン帝国、その他周囲の国との戦争によって、ど

んどん領土が縮小してきた。一九二二年に始まった第一次バルカン戦争の後にオスマン帝国からの独立を宣言したが、イギリス、フランス、イタリアなどからなる委員会が深く考えずに国境を決めたために、アルバニアはそれまで領土としていたコソボを失った。一九三九年にイタリアに、イタリア降伏の一九四三年にはドイツに占領されたが、アルバニア共産党を中心とした抵抗運動によって、一九四四年に全土が解放されて、社会主義国家であるアルバニア人民共和国が設立された。

一 時は親睦、連だったアルバニアだが、スターリン批判が起ころし連の共産主義が変質を始め、周囲の国々を隷属化しようとした時にソ連離れを始め、一九六八年にワルシャワ条約機構を脱退し、中国と手を結んで露骨にソ連を仮想敵国とみなす極左的な政策をとった。なぜ隣国のユーゴスラビアではなく中国と密接な関係をもったのか。アルバニアにとっては、選択の余地はなかった。ユーゴスラビアは多民族の連合体であり、まとまっていこうと、それぞれの民族がそれぞれの利益を求めようとする国だ。そんな国に隣国がうっかり近づいたら、いいなりになつてしまふのが明白だったから。ユーゴスラビアでは、アルバニア人とセルビア人の激しい対立があったが、アルバニアという国がセルビアと戦争をしたことはほとんどなく、禍根もない。ユーゴの場合は言

語も民族も異なる人々が力によって一國にまとめられていた分、衝突も激しくなつたのだらう。ベルリンの壁崩壊後、一九九二年に非共産政権が誕生、二〇〇九年にはNATOにも加盟した。日本とはアルバニアが経済的に非常に厳しかつた。一九八二年に国交を樹立、それ以降にだいに関係を深め、二〇〇八年にはベリシヤ首相がアルバニア首相としては初めて日本を訪問している。命を賭けたせめぎあい、竹島周辺で行われている

尖 閣諸島で中国漁船が海上保安庁の巡視船に衝突した事件でみんな騒いでいるが、韓国との間で領土問題となつている竹島周辺では、もっと苛酷なやりとりが行われている。韓国の船が巡視艇に体当たりするのは当たり前。前哨を巡視船のスクリーンに絡ませてこわしたり、殺された海上保安官が事故死として処理されているという話もある。六年前の二〇〇四年三月二十四日、中国人の活動家七人が徒党を組んで尖閣諸島の魚釣島に上陸した。この行動の首謀者はさらにそれより三年前に、靖国神社の狛犬に赤のラッカーで「死ね」と落書きして有罪になり、執行猶予中だった男だ。にもかかわらず、一旦中国に戻って資金をもらい、仲間を集めて魚釣島に上陸して灯台に傷をつけ、日本国旗を焼いたのである。当然海上保安庁は彼らを逮捕

そ したのだが、無罪放免で釈放した。科者なのだから、本来であれば逮捕して執行猶予を取り消し、起訴して裁判にかけるのが筋だ。なのになぜできなかったのか。これが自民政権の方針だったのだ。

日本は自衛隊として軍備は持っているが、交戦権も持たないために兵器が使用できない。中国は今回体当たりしてきた。これは相手が違う国であれば、撃沈されてもしょうがない行動だ。しかし日本の場合、海上保安庁も自衛隊も、武器を使用できるのは正当防衛か緊急避難の場合のみだし、その使い方も正当防衛と緊急避難の程度を超えてはいけない。射撃してきたのではなく体当たりされた場合、明確に兵器で反撃することができない。それをわかっている、中国漁船はぶつかったのだ。世界の中でもこんな行為をされて、立件しないのは日本ぐらいだろう。それは交戦権がないために、きちんと軍事力を行使できないからだ。北では、ロシアは領海を侵犯した日本人漁船員を射殺した。この違いは歴然であり、ロシアは軍隊があつて武力行使が可能だから、そういう対応ができたのだ。

交戦権を持たない日本は領海侵犯に対応できない

そもそも海上保安庁は国土交通相管轄の組織であり、単なる警

